

向尾根遺跡 (第1・2次発掘調査)

駐在所 (第1次) と 教員住宅 (第2次) 建設に伴う緊急発掘調査報告書



1987.3

長野県原村教育委員会

序

原村が位置する八ヶ岳西麓の一帯は、遺跡の宝庫ともいえるほど大小様々な遺跡が埋蔵されています。それは旧石器時代から縄文時代そして平安時代を経て、中世にわたる時期のいずれかに属し、遺跡の規模にかかわらずそれぞれが私たちの先人が残していった足跡であり歴史を知る上で貴重な遺産であります。

このたび、発掘調査報告書を刊行することになりました向尾根遺跡は、昭和50年原村警察官駐在所・昭和54年度には教員住宅の建設に先立って原村教育委員会が緊急発掘調査を行ったものであります。当地方においては小規模な遺跡でしたが、いくつかの貴重な資料を得ることができました。

発掘調査から報告書刊行までの間、調査担当者の宮坂光昭、武藤雄六両氏をはじめ、発掘に携わっていただいた皆様方、関係者各位の御好意・御尽力に心から謝意を表する次第であります。

昭和62年3月31日

原村教育委員会

教育長 平林 太尾

例 言

1. 本報告は、駐在所と教員住宅の建設に先立って実施した、長野県諏訪郡原村弘沢に所在する向尾根遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、原村教育委員会が昭和50年7月26日から8月25日と、昭和54年5月10日から18日の2次にわたって実施した。
3. 執筆は、武藤雄六と平出一治が話し合いのもとに行い、図面の作図は武藤・折井敦（第1次）、五味一郎・平出（第2次）、拓本は平林とし美、石器の実測は折井・五味、トレースと編集は平出が行った。
4. 本調査の出土遺物・記録等はすべて原村教育委員会で保管している。

目 次

序		鉄製品	
例 言		4 第1次調査のまとめ	
目 次		IV 第2次発掘調査……………12	
I 遺跡の位置と環境……………1		1 調査の状況と土層	
II 調査の経過……………4		2 縄文時代の遺物	
第1次発掘調査……………7		土 器	
第2次発掘調査		石 器	
III 第1次発掘調査		3 平安時代の遺物	
1 調査の状況と土層		土 器	
2 縄文時代の遺構と遺物		4 近世の遺構	
(1) 遺 構		2号墓墳	
集礫遺構		5 第2次発掘調査のまとめ	
(2) 遺 物		V 結 語……………16	
土 器			
石 器		参考文献	
3 近世の遺構と遺物		発掘調査団名簿	
(1) 遺 構		第1次発掘調査（昭和50年）	
1号墓墳		第2次発掘調査（昭和54年）	
(2) 遺 物			

I 遺跡の位置と環境

向尾根遺跡(原村遺跡番号29)は、村の役場や小学校に隣接する長野県諏訪郡原村6562番地付近に位置する。

このあたりは八ヶ岳西麓のほぼ中央に位置し、裾野の2kmほど上から開析のはじまる大早川の左岸にあり、二つの尾根の接点を頂点とするなだらかな南斜面から凹地にかけて、いわゆる日溜り地形に遺跡がある。なお、二つの尾根の内、南側の尾根は学校建設の際すでに掘り取られて平坦化している。

発掘地点の地目は、第1次・第2次とも普通畑であるが、以前から宅地化されていたところで、遺跡の保存状態は良くない。

遺跡のある斜面から凹地付近は、ローム層の堆積が厚く数mに達している箇所もある。尾根と尾根との中間の低地は、含礫ローム層となっているところもある。

これより西は、約1.5km先でフォッサマグナの西縁である糸魚川—静岡構造線の断層崖に沿っ



1 第1次調査区の駐在所 2 第2次調査区

第1図 向尾根遺跡(昭和54年5月撮影)

て北へ流れる宮川によって断ち切られる。

八ヶ岳西南麓一帯の尾根には、縄文時代を中心とした遺跡が数多く埋蔵されている。この向尾根遺跡の周辺には、大小様々の遺跡が分布しており、その密度は極めて高い地域で、第2図および表1に示したとおりである。

それらの中ですでに発掘調査されている遺跡は、20の前尾根遺跡・32の大横道上遺跡・33のワナバ遺跡・35の臥竜遺跡・53の雁頭沢遺跡・54の宮ノ下遺跡・75の山の神上遺跡があり、縄文時代中期から後期初頭にかけての住居址や土器・石器が発見されている。

しかし、まだ発掘調査されたことのない遺跡や、調査されてはいてもその対象範囲が狭かった点で、遺跡の性格については不明瞭な面がまだ多く残されているが、縄文時代中期から後期初頭にかけての遺跡群が形成されている地域であることは確かなようである。

表1 向尾根遺跡と付近の遺跡一覧

番号	遺跡名	旧石器	縄文						弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
			草	早	前	中	後	晩							
20	前尾根				○	○					○			昭和44・52・53・59年度発掘調査	
24	恩膳			○		○	○				○				
25	裏尾根					○									
26	家下					○					○			昭和59年度発掘調査	
27	關盧沢					○					○				
28	宮平											○			
29	向尾根					○	○				○		○	昭和50・54年度発掘調査	
30	南尾根					○					○				
31	中尾根										○				
32	大横道上					○	○				○			昭和42・51年度発掘調査	
33	ワナバ					○									
34	栃の木						○	○							
35	臥竜				○	○	○							昭和33・35・36・45・57年度発掘調査	
53	雁頭沢					○							○	昭和54・57年度発掘調査	
54	宮ノ下			○		○					○	○	○	昭和57・58年度発掘調査	
55	中尾根					○	○				○				
56	家前尾根					○					○				
57	久保地尾根					○									
75	山の神上			○			○							昭和45・57年度発掘調査	



第2区 向尾根遺跡の位置と付近の遺跡 (1 : 20,000)

II 調査の経過

第1次発掘調査

この地域から土器破片は採集されていたが、遺跡の範囲については未だ明確にされたことはなかった。たまたま駐在所の新築が決定したことによって、遺跡確認のための試掘孔(30×20×50cm)を1ヶ所掘ってみたところ、縄文時代の土器破片を発見した。そこで、村教育委員会では遺跡保護にたいする検討を行い、記録保存のための緊急発掘調査を実施することにした。

発掘は、長野県諏訪郡原村6549番地1、原村教育委員会教育長小泉真澄が発掘責任者となり、発掘担当者には日本考古学協会会員の宮坂光昭が当たった。

調査は、昭和50年7月26日から8月25日にわたって実施した。

7月26日に地形測量と、駐在所建設予定地内に2×2mの基準方眼であるグリッド30個を設定し、便宜上、南北方向はA～Eのアルファベットを、東西方向には1～6の算用数字を用いて個々のグリッドを呼ぶことにした(第3図、第4図)。

その後、グリッドの平面発掘を層別別に進め、C1・B2・C2・D2・B3・D3・B4・D4・C5・D5・E5グリッドで礫を検出する。それらの礫を露出させ精査をはじめたところ、人為的なものであり、その状態から「集礫遺構」と呼ぶことにした。また、集礫遺構より新しい落込み(1号墓墳)を検出した。

発見した遺物は少ないが、土器破片・打製石斧・凹石がある。

27日は、集礫遺構および1号墓墳の精査を行う。発見下遺物はやはり少ない。

遺構の実測および記録等を行い最終的に調査を完了したのは、整地工事の行われた8月25日である。この間、延25人を要し発掘を完了した。

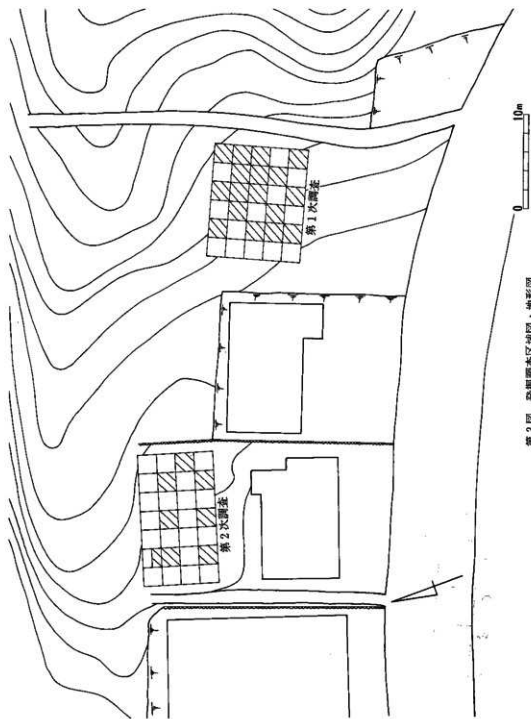
第2次発掘調査

第1次調査地点の西方約30mの所に、教員住宅の建設が決定した。村教育委員会では遺跡保護にたいする検討を行い、記録保存のための緊急発掘調査を実施することにした。

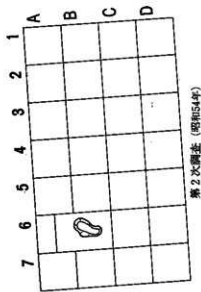
発掘は、原村教育委員会教育長松沢達が発掘責任者となり、発掘担当者には日本考古学協会員の武藤雄六と原村教育委員会の平出一治が当たった。

調査は、昭和54年5月10日から18日にわたって実施した。

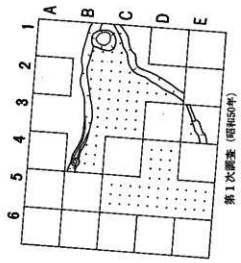
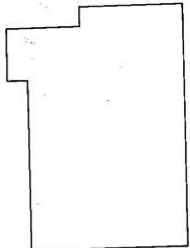
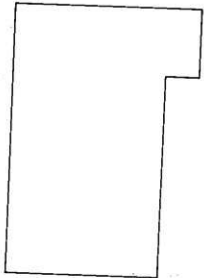
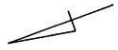
5月10日に地形測量と教員住宅建設予定地内に、2×2mのグリッド28個を設定した。グリッドの設定方法は第1次調査と同様であるが、その方向は一致していない。やはり、南北方向はA～Dのアルファベットを、東西方向には1～7の算用数字を用いて個々のグリッドを呼ぶことにした(第3図、第4図)。



第3图 梁州调查区域·地形图



第2次調査 (昭和54年)



第1次調査 (昭和50年)



第4図 グリッド配置図・連携位置図

11日から15日日にかけてグリッドの平面発掘を層位別に行った。B6グリッドで2号墓壙を発見し精査を行う。遺物は縄文時代の土器破片・黒曜石の剥片と、平安時代の土師器と須恵器の小破片を僅かに発見しただけである。

その後、遺構の実測・地形測量の補正および記録等を行い、最終的に調査の完了したのは18日である。この間、延14人を要し発掘を完了した。

Ⅲ 第1次発掘調査

1 調査の状況と土層

発掘は、設定したグリッドの全てを調査することはできなかったが、17グリッドで68㎡を層位別に調査した。

発掘地点のほぼ中央の軟質ローム面で、凹地の展開方向に発達した縄文時代の集礫遺構1と、近世の墓壙1基を検出調査している。遺物の発見は少なく極めて稀であった。

本調査地点の層序は次のとおりである（第5図）。

第I層 耕作土層（表土層） 約50cmと厚かったが、すでに旧地主が発掘以前に20cm位取り去ってあった。

第II層 軟質ローム層 第IV層よりは汚れた状態で、流れ出してきたものであろう。なお、この層が認められたグリッドは少ない。

第III層 真黒色土層 40～50cmと厚い腐植土層。

第IV層 軟質ローム層 10～20cm。

第V層 ローム層 僅かながら円礫が混じっている。

2 縄文時代の遺構と遺物

(1) 遺 構

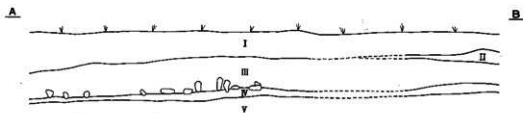
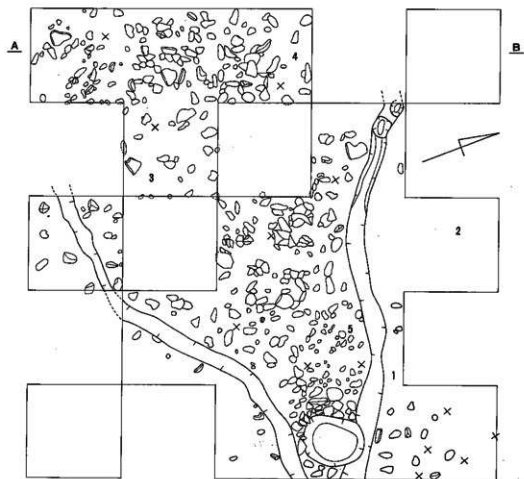
本調査では、周溝を伴う集礫を発見した。

集礫遺構

凹地の展開方向に発達した周溝を伴う集礫で（第5図）、その全てを調査することはできなかったが、調査範囲内において若干の説明を加えてみたい。

図示してあるように、集礫の外縁部で検出した周溝は、軟質ローム面を幅20～50cm、深さ5～10cmに掘り凹めたもので、その方向は凹地の展開方向と同様な傾向を示していた。周溝の状態は一樣ではなくBグリッド辺りでは、周溝壁の立ち上がりは確りしていた上に、35×45cmと27×35cmの小ピットが周溝内に認められた。

なお、周溝のあり方から見て、それは発掘区の東辺から1m程の地点で交わっているものと推



- | | |
|--------|-----------|
| × 土器破片 | I 耕作土層 |
| 1 打製石斧 | II 軟質ローム層 |
| 2 凹石 | III 真黒色土層 |
| 3 磨石 | IV 軟質ローム層 |
| 4 石楯 | V ローム層 |



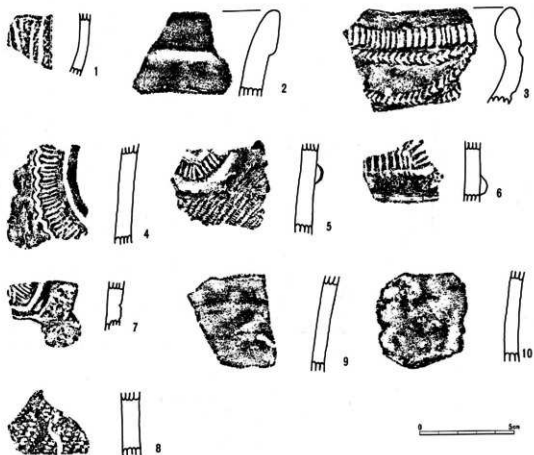
第5区 集礫遺構実測図

察された。

周溝の内側には、多量の礫が集中していた。それらは平らに敷きつめられた部分と方形または円形に組まれた部分とがあり、全く不規則な箇所も多かった。それに対して、周溝の外、南側には集礫はなく、ローム中に小礫が僅かに点在しているだけであった。北側にもやはり集礫はなかった。このように、周溝をはさんだ内と外では歴然とした違いがみられた。礫は全て当地方で産出する輝石安山岩の転石で、その大きさは、子供の握り拳大から大人の頭大よりやや大きなものまで、大小さまざまで統一した規格品はなかった。集礫の下層からは土壌などの施設は検出できなかった。

なお、集礫内には砂利や砂は一切認められず、河川によって形成されたものでないことは確実である。また、大早川との比高差は10mに近く、自然礫が流入する余地は全く考えられない。

以上のように、礫は周溝の内側に限って発見されたことからみて、礫と周溝は一環したものであり、同時期に存在していた施設であることは理解できよう。



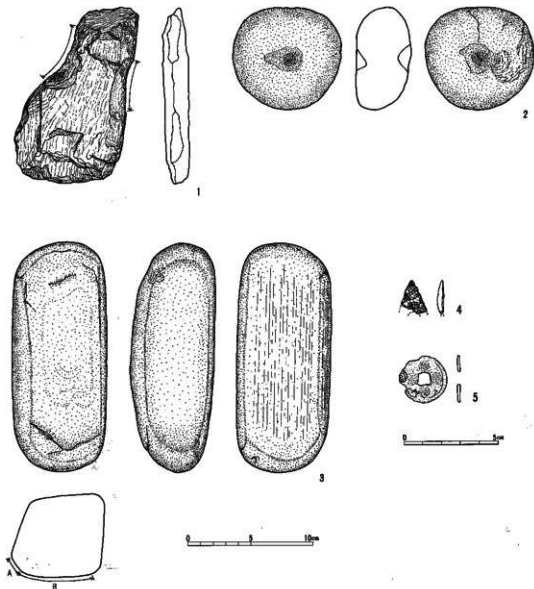
第6図 縄文時代の土器拓影

(2) 遺物

本調査で発見した遺物は少なかったが、土器と石器がある。

土器は全て破片で、15点を発見したにすぎない。集礫内からは1グリッド1点位の割合で出土している(第5図の×印)。石器は打製石斧(第5図の1)・凹石(2)・磨石(3)と石鏃(4)がそれぞれ1点出土した。なお、磨石と石鏃は集礫内からの発見であった。

それらの資料に若干の考察を加えてみたい。



(1-3 1:3、4-5 1:2)

第7図 縄文時代の石器・近世の鉄製品実測図

土器

小破片ばかりであるが、時期判別できる土器10点を図示した(第6図)。

縄文時代中期初頭の九兵衛尾根Ⅱ式土器の胴部破片(第6図1)と口縁部破片(2)の2点と、爪形連続文と比較的幅の広い山形連続刺突文で飾られた中葉の新道式土器の口縁部破片1点(3)、並びに藤内式土器4点(4~7)などが主なものであった。(4~6)は藤内式土器の特徴の1つである爪形連続文の施された深鉢の胴部破片で、(4)は抽象文土器と呼ばれているものであろう。(7)は剥落した箇所があるが区画文土器である。

地文に結節縄文が施された中期後葉の曾利Ⅱ式土器の胴部破片(8)。無文の(9・10)はいずれも後期初頭の椀ノ内Ⅰ式に比定されるべきものである。

石器

石器は4点と少ないが、硬砂岩製の打製石斧の優品がある(第7図1)。この打製石斧は撥形に近い分銅形で後期の所産であろう。輝石安山岩製の凹石(2)と同じ石質の磨石(3)がある。凹石は転石の両面に角1穴を有するものであるし、磨石は角柱状の転石を利用した比較的大きなものである。黒曜石製の石鏃(4)は、両脚を欠損しているが、中期に一般的にみられる形態である。このほかに図示していないが、黒曜石の剥片がある。

3 近世の遺構と遺物

(1) 遺構

本調査では、墓墳1基を発見しただけである。以下、若干の説明を加えておきたい。

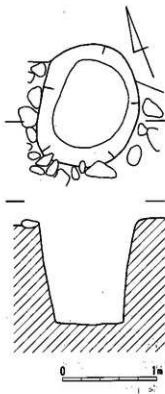
1号墓墳

発掘区の東外れにあたるB1グリッドからC1グリッドにかけて検出した(第4図、第8図)。

1号墓墳は、縄文時代の集落遺構を破壊して作られていたが、その平面形は不整楕円形を呈し、大きさは長軸1m34cm、短軸1m5cm、深さ1m10cmである。底は平坦で10~20cm位小さくなる。壁の立ち上がりは確りしている(第8図)。

埋土は、ローム塊と僅かな黒色土で、一見して自然埋没とは思われぬ状態であった。前記したように、墓墳の壁が極めて確りしていたことから考えると、掘り上げた穴を極めて短時間の後に人為的に埋めもどしたもので、現在における埋葬の習俗と同様である。

記載が前後してしまっただが、墓墳内には、黄褐色を呈した大形の太い人骨が残っていた。このことによって、本遺構が墓墳



第8図 1号墓墳実測図

であることが明確になった。

なお、この墓墳の形態は、当地方における一般的なもので、発掘に参加した笠原隆光氏の話によると、木製の立棺を入れたのだそうである。

(2) 遺物

鉄製品

古銭が1点出土したが、腐蝕がはげしく文字の判別が困難な程である。鉄製の寛永通宝であろう(第7図5)。

4 第1次発掘調査のまとめ

本調査地域は、遺跡全体からみたら僅かな範囲であるが、縄文時代中期の集落遺構をもつ遺跡であり、近世の土墳墓を伴った複合遺跡でもあった。

集落遺構から発見した遺物は少なく、集落の構築された的確な時期を示すことはできないが、ここでは縄文時代の中期も前半期と考えたい。その後、後期初頭まで引続いて関係のあったことが窺われる。

この種の遺構の類例は、やはり原村の宮蒲沢・大石遺跡の配石状礫群があり、その名称こそ違っているが、構築されていた地形・礫のあり方から形状まで全て同様である。ただ礫の大小と周溝並びに下層で発見された土壌の有無の違いだけで、大局的には同一の遺構と考えてさしつかえないだろう。

今回の調査結果では、本遺跡は集落遺跡とは考えられない状態であり、集落遺構の構築の必然性については、現在のところ何もわかっていない。

構築した人たちおよび性格については、東に隣接する南尾根遺跡(第2図の30)で、縄文時代中期中葉の新道式土器5点が耕作中に一括出土したことにより、住居址の存在が考えられる遺跡である点から、付近一帯の遺跡を考慮した上で究明していかねばならないだろう。

発掘地点は、調査終了後に駐在所が建設された。

IV 第2次発掘調査

1 調査の状況と土層

発掘は、設定した28グリッドの内、8グリッドの30㎡を層別別に調査した。

縄文時代の土器破片と石器、平安時代の土師器と須恵器の小破片を発見した。しかし、これらの遺物に該当する遺構を検出するまでにはいたらなかった。

発掘地区の北寄りのB6グリッドで近世の墓墳1基を検出調査している。

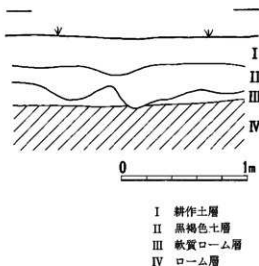
本調査地点の層序は次のとおりである(第9図)。

第I層 耕作土層(表土層) 20~30cm。

第II層 黒褐色土層 10~30cm。第1次調査の第III層真黒色土層にあたる層で、本層の方が黒色が弱く上に褐色が強い。地点の違いで色彩に違いがみられたのであろう。本層は波状となりロームまで達している箇所もみられた。

第III層 軟質ローム層 5~20cm。第II層の凹凸が著しいため、本層の認められない箇所が僅かにある。

第IV層 ローム層 小さな円礫が混じっている。



第9図 D6グリッド南壁土層断面図

以上のように、基本的には第1次調査地点の層序と同様であった。ただ、人為的な擾乱とは思えない不安定な箇所が多く見られた。

2 縄文時代の遺物

縄文時代の遺構を発見するまでにはいたらなかったが、土器と石器を僅かに発見した。これらの遺物に若干の説明を加えてみたい。

土器

小破片ばかりであるが、時期判別できる土器14点を図示した(第10図)。

縄文時代中期初頭の九兵衛尾根式土器は8点(第10図1~8)で、比較的薄手で爪形連続文が施された隆帯と、沈線文で飾られたもの(1)、丸棒状工具による沈線文・交互連続刺突文と隆帯の施されたもの(2)。地文に縄文が施された口縁部(3)、この時期にみられる特徴的な張り出し底の破片(4)。小破片のため明確なことはいえないが、胎土・焼成とも本時期と思われるもの(5~7)で、結節の痕跡が僅かに認められるものもある(7)。全て深鉢の破片であろう。

中期中葉の藤内式土器(8)は、弱い沈線が施された下部破片で、内面に炭化物が付着している。

中期末葉の曾利IV式土器(9)は、沈線と隆帯とで施文された胴部破片。

中期最末の曾利V式ないし井戸式土器(10~12)は、大柄な沈線文によって縄文帯と無文帯とを分けるものと(10・11)、断面三角形を呈する隆帯で縄文と無文部分を分けたものがある(12)。

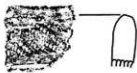
後期初頭の堀ノ内式に比定されるべきもので(13・14)、これは同個体の破片と思われ、円柱状の小さな把手が加飾されている(13)。



1



2



3



4



5



6



7



8



9



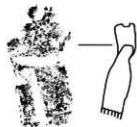
10



11



12



13



14



第10図 縄文時代の土器拓影 (1:2)

これらのほかに時期の判別できない小破片が数点ある。

石器

いわゆる定形石器は1点もなく、図示していないが、黒曜石の剥片とチップを発見しただけである。

3 平安時代の遺物

土器

やはり遺構を検出するまでにはいたらなかったが、土師器と須恵器の小破片を僅かに発見した。

図示していないが、土師器・須恵器とも坏の破片で、土師器は内面黒色土器である。

4 近世の遺構

本調査で発見調査した遺構は、墓墳1基だけである。

2号墓墳

発掘区の北寄りのB6グリッドで検出し、A6グリッド半分を拡張することにより、その全貌がはっきりになった(第4図、第11図)。

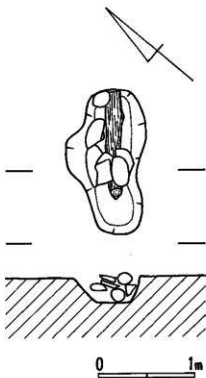
2号墓墳は長軸150cm、短軸78cmの不整楕円形を呈し、深さは26cmと浅い。墓墳内には当地方で産出する輝石安山岩の礫8点と、径8~12cm、長さ114cmの部分炭化した丸木材が埋蔵されていた。

精査する折に、骨片が僅かに確認できたことにより、本遺構を墓墳と考えたが、時期を明確にできるような遺物は一切発見できなかった。

帰属時期については、この付近一帯が近世の墓地であるといえられていることから、ここでは近世の墓地と考えておきたい。

5 第2次発掘調査のまとめ

本発掘地点からも縄文時代の土器破片を発見した。時期別には縄文時代中期前半・中期最末から後期初頭で、第1次調査と似通った傾向を示していた。しかし、その数は極めて少ない上に遺構を発見するまでにはいたらず、遺物の出土状態からみると、遺跡の外縁部とも思えたが、調査範囲がせまいこともあり、遺跡の性格を把握することはできなかった。



第11図 2号墓墳実測図

V 結 語

向尾根遺跡は、どちらかというと極めて小規模な遺跡の部類に属し、調査されずに破壊されてしまう場合が多かった。

その点、今回の調査は、所謂、発掘による成果こそ少なかったが、見捨て去られる運命にある小規模遺跡の性格が判明しただけでも良しとしなければならないと思う。

とかく最近、遺跡の発掘と言えば、大々的にマスコミに報道されるような成果があがらないと、発掘の担当者が悪者扱いされるような傾向がないでもない。こうしたなかであって、今回の調査を実施された原村教育委員会の御配慮に敬意を表すと共に、調査に参加された各位に御礼申し上げて結語としたい。

参考文献

- 1980. 03 長野県教育委員会 【八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査報告書】
- 1985. 07 原村役場 【原村誌 上巻】



第12図 発掘風景（第2次調査）



第13图 2号墓坑全景

発掘調査団名簿

第1次発掘調査(昭和50年)

団 長 小泉真澄(原村教育委員会教育長)
調査担当者 宮坂光昭
調 査 員 武藤雄六・小林公明・折井教
調査補助員 五味一郎・高見俊樹・島田哲男・笠原隆光・池学

第2次発掘調査(昭和54年)

団 長 松沢 達(原村教育委員会教育長)
調査担当者 武藤雄六・平出一治
調 査 員 小林公明・五味一郎
調査参加者 笠原隆光・清水さわの・牛山きよの・鎌倉たけみ (順不同)

原村の埋蔵文化財 5

・向尾根遺跡(第1・2次発掘調査)

駐在所(第1次)・教員住宅(第2次)建設に伴う緊急発掘調査報告書

発行日 昭和62年3月

発 行 原村教育委員会
長野県諏訪郡原村

印刷所 ほおずき書籍株式会社

